

「乳児保育」における手作りおもちゃの意義と学び

前 林 英 貴

(保育学科 小児保健学研究室)

The Significance and Educational Value of Handmade Toys in “Infant Childcare”

Hidetaka MAEBAYASHI

キーワード：乳児保育、手作りおもちゃ、3歳未満児、学び

Keyword：infant childcare, handmade toys, children under 3 years of age, educational value

1. はじめに

2016年9月に厚生労働省より発表された保育所等関連状況取りまとめでは、保育所等を利用する児童の数は246万人と前年比8万5千人増となり、同時に保育所等定員も263万人と前年比10万3千人増となった¹⁾。2013年4月から進められた「待機児解消加速化プラン」により、2013年度から2015年度までの3年間で保育拡大量は約31万4千人まで増え、2017年度までには5年間で約48万4千人の保育拡大量を見込んでいる。保育所等の利用する児童の内訳では、3歳未満児の利用率が3歳以上児と比較すると年々増加する傾向にあり、核家族化や女性の社会進出などにより3歳未満児を対象とした乳児保育のニーズが年々高まっていることが考えられる。その反面、待機児童数は2016年4月1日時点で23,553人と前年比386人増加しており、中でも3歳以上児が減少しているにもかかわらず、3歳未満児では顕著に増加していることがわかっている²⁾。待機児童数の推移を表1に示す。

表1 待機児童数の推移 (厚生労働省2015～2016)

	2016年待機児童	2015年待機児童
低年齢児(0～2歳)	20,446人(86.8%)	19,902人(85.9%)
うち0歳児	3,688人(15.7%)	3,266人(14.1%)
うち1・2歳児	16,758人(71.1%)	16,636人(71.8%)
3歳以上児	3,107人(13.2%)	3,265人(14.1%)
全年齢児計	23,553人(100.0%)	23,167人(100.0%)

子育ては3歳までは家庭で母親によって行われるべきであるという、いわゆる「3歳児神話」は過去のものとなり、このように保育現場に求められる乳児保育は社会情勢と密接な関係にあり、3歳未満児の待機児童解消のためには、乳児保育の実施率が継続的に上昇することが望まれる。しかしながら、乳幼児突然死症候群(SIDS)の危険性やアレルギーを持つ児の増加など、近年乳児保育を取り巻く問題も多く、乳児保育の難しさを感じる保育者も多いと考える。

乳児保育を実践するにあたり、3歳未満児の活動を3つに分けることができる。勅使(2007)によると、保育内容の構造図には、生活習慣の形成や生活技術を獲得する活動、遊び、人類の分化やスポーツの基礎的な分野の活動を指す課業の3つがあると述べている³⁾。3歳未満児においては、食事や睡眠、排泄、

清潔、衣類の脱着といったような基本的な生活習慣を身に付ける活動は、保育のなかで最も時間をかけるべきものであるが、遊びの活動の占める時間は年齢とともに多くなり、その種類や質も高くなっていく。そのため乳児保育では、子どもの遊びは大切なものとして位置付けることができ、遊びの中で用いる遊具や道具によって、子どもの遊びが一層豊かなものに変化するのである。

2. 保育学科の学生の意識

筆者は本学において科目「乳児保育」を担当しているが、授業内で学生に尋ねた「乳児保育のイメージ」では、「可愛い」「個別性に配慮する」「大切」「成長を感じることができる」などのポジティブなイメージが多かった。しかしその反面、乳児保育は「大変」「責任重大」「難しい」「意思疎通ができない」などのネガティブなイメージも多くみられた。本学において乳児保育を受講する学生は、短期大学部の2年生であるため、既に保育所実習を経験しており、実習での体験からネガティブなイメージを持つ学生もいるかもしれない。乳児保育では普段から触れ合う機会の少ない0歳から2歳児を対象としており、保育学生が卒業までの実習などでも、その機会がないまま卒業して現場に出ることも多い。さらに、自分の過去の経験を考えてみても、0歳から2歳頃の記憶はほとんど憶えておらず、自身の経験や体験からそれをイメージすることは難しい。しかし、乳児保育に対する不安を持ちながらも、その必要性を学生に感じてもらうためには、乳児保育に対する不安を少しでも軽減できるような授業内容の構成が求められる。菊池(2014)の研究によると、保育を学ぶ学生にとって乳児保育の魅力と困難さは何かという質問に対して、魅力については「体の小ささ」「未熟な会話力」「未熟な表現力」といった子どもの発達に関することが多く、困難さについては「健康管理」「安全確保」といった保健的な対応が最も多かった⁴⁾。また野中(2008)によると、「乳児保育」を履修しようとする学生は「乳児との接し方・関わり方」について学びたいと回答した学生が多く、「乳児保育」を履修した学生では「0・1・2歳児の遊

びの特徴と保育者の援助」についてもっと学びたかったと回答した⁵⁾。

このように乳児保育に関して、保育を学ぶ学生は困難さを感じながらも、乳児の発達や関わり方について興味を持っており、特に科目としての「乳児保育」に対しては、意思疎通が難しい乳児との遊びと、保育者の援助について学びたいと感じている。保育士養成課程の中での「乳児保育」の学習方法は「演習」であり、保育士を目指す学生には保育実践力の育成が求められる。そのため、今回科目「乳児保育」の授業の中で、グループワークとして3歳未満児の手作りおもちゃの作成を実施したので、その結果と成果を報告する。

3. 乳児保育の位置づけ

1947年に制定された児童福祉法では、保育所を「保護者の委託を受けて、保育に欠けるその乳児又は幼児を保育することを目的とする施設」とし、当初から乳児を対象とした保育が行われていた。児童福祉法が定める乳児とは、満1歳に満たないものと定義されているが、保育現場では長年にわたり「乳児保育」を3歳未満児保育と捉えてきた。また、保育所保育指針でも同様に、3歳児未満と3歳以上児の発達過程は大きく異なることから、保育の内容や方法を分けている。保育士養成課程の科目「乳児保育」においても、学習目標を3歳未満児の発達・保育について学ぶこととし、「6か月未満児」「6か月から1歳3か月未満児」「1歳3か月から2歳児未満児」「2歳児」の4区分に分けているため、本研究においても「乳児保育」を3歳未満児として位置付ける。

4. グループワークの概要

手作りおもちゃの作成は、90分の授業を2コマ使用してグループワークを行った。

1) 手作りおもちゃのテーマは以下の5点とした。

- ・乳児の月齢（発達段階）を考慮する
- ・運動機能や認識機能、情緒を考慮する
- ・手軽で誰でも作成できる（廃材を利用）
- ・安全性に配慮する
- ・実習や就職後にも活用できる

2) グループ分け

学生52名に対してくじ引きを行い、1グループ3～4名の少人数グループとしてA～Qの計17グループに分けた。また、A～Eの5グループを「6か月未満児」、F～Jの5グループを「6か月から1歳3か月未満児」、K～Nの4グループを「1歳3か月から2歳児未満児」、O～Qの3グループを「2歳児」と4区分に分けた。

3) 企画書の作成

手作りおもちゃ作成前に、グループごとに企画書を作成した。

4) 手作りおもちゃの作成

学生はグループごとに用意した廃材を利用し、企画書に沿って手作りおもちゃを作成した。作業場所として、事前に美術担当教員に依頼して保育学科内の絵画制作室を使用してもらい、工作で必要となる道具も準備した。

5) プレゼンテーション

完成した手作りおもちゃを展示し、グループごとに発表を行った。各グループ2分程度で作品名、作成にかかる時間、ねらい、セールスポイント、発達段階に留意した点などをプレゼンテーションした。

6) 学生による講評

発表しているグループ以外の学生は、評価シートを使って自分のグループ以外の作品を全て評価した。評価シートにはミシン目が付いており、良い点と改善点を記入した後、切り離してグループごとに集計を行い、その結果を各グループで企画書に記入をした。

7) 作品集の作成

全ての作品を画像データとして保存し、要点をまとめた内容とともに作品集を作成し、配布をした。

5. グループワークで作成された手作りおもちゃ

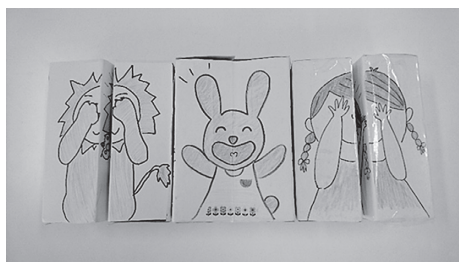
学生が作成したおもちゃは、大きさや形、材料、作成にかかる時間など様々であった。音の出るものから、色のついた水を使用したもの、今にも走り出しそうな車、大型のパズルなど、学生が主体となり作品の企画から作成、発表を行うことができた。また短時間の演習であったが、学生同士が協力し合う

ことで全てのグループが作品を時間内に作成し、計17の作品が完成した。その作品名と対象月齢・年齢区分を表2に示す。

表2 手作りおもちゃの作品名と対象月齢・年齢区分

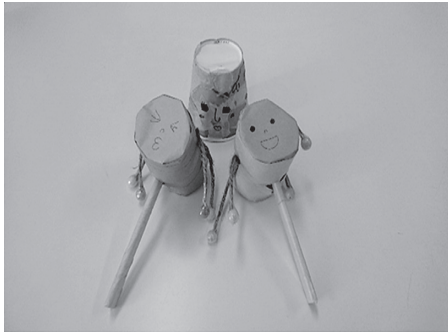
対象年齢	グループ	作品名
6か月未満	A	キャップマラカス
	B	たまごガラガラ
	C	いないいないばあ！！
	D	ガラガラ
	E	イモムシ
6か月から1歳3か月未満	F	デンデンデンデンDAICO
	H	かたぬきおもちゃ
	I	わくわくタワー
	J	ガラガラ
1歳3か月から2歳未満	K	ペットボトルカー(ブタさん号)
	L	それいけ!アパンマンパズル
	M	ペットボトルマラカス
	N	コロコロロボット
2歳	O	紙コップのパクパク人形
	P	牛乳パックブロック
	Q	いれたらポン!

全グループが作品を完成させた後に、作品集用に手作りおもちゃの画像をグループごとに撮影した。各発達段階から手作りおもちゃの企画書と作品例の一部を図1から図4で紹介する。



企画書		作品名	
対象年齢・年齢区分	作成にかかった時間	対象年齢・年齢区分	作品名
6か月未満	10分	6か月未満	キャップマラカス
6か月未満	15分	6か月未満	たまごガラガラ
6か月未満	15分	6か月未満	いないいないばあ！！
6か月未満	15分	6か月未満	ガラガラ
6か月未満	15分	6か月未満	イモムシ
6か月から1歳3か月未満	15分	6か月から1歳3か月未満	デンデンデンデンDAICO
6か月から1歳3か月未満	15分	6か月から1歳3か月未満	かたぬきおもちゃ
6か月から1歳3か月未満	15分	6か月から1歳3か月未満	わくわくタワー
6か月から1歳3か月未満	15分	6か月から1歳3か月未満	ガラガラ
1歳3か月から2歳未満	15分	1歳3か月から2歳未満	ペットボトルカー(ブタさん号)
1歳3か月から2歳未満	15分	1歳3か月から2歳未満	それいけ!アパンマンパズル
1歳3か月から2歳未満	15分	1歳3か月から2歳未満	ペットボトルマラカス
1歳3か月から2歳未満	15分	1歳3か月から2歳未満	コロコロロボット
2歳	15分	2歳	紙コップのパクパク人形
2歳	15分	2歳	牛乳パックブロック
2歳	15分	2歳	いれたらポン!

図1 6か月未満児の手作りおもちゃ (Cグループ)



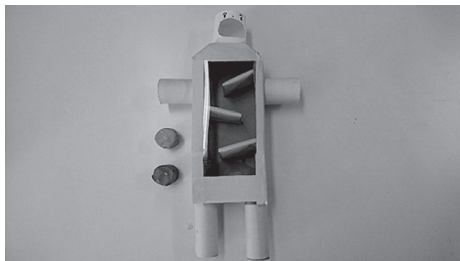
図案	作品名	
	対象年齢・年齢	作成にかけた時間
	グループ名	メンバー名
	ねらい	キーワードと 発達段階に留意した点
	キーワード ・音の出るおもちゃ ・顔が笑っている ・足が動く	発達段階に留意した点 ・音の出るおもちゃは、1歳3か月未満児の発達段階に合わせたおもちゃである。 ・顔が笑っているのは、子どもが喜ぶおもちゃである。 ・足が動くのは、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。
材料・道具	発想	最終結果(良い点・改善点)
・紙の空き箱 ・糊 ・紙 ・ペン ・マジック	音の出るおもちゃは、子どもが喜ぶおもちゃである。 顔が笑っているのは、子どもが喜ぶおもちゃである。 足が動くのは、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。	・音の出るおもちゃは、子どもが喜ぶおもちゃである。 ・顔が笑っているのは、子どもが喜ぶおもちゃである。 ・足が動くのは、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。

図2 6か月から1歳3か月未満児の手作りおもちゃ (Fグループ)



図案	作品名	
	対象年齢・年齢	作成にかけた時間
	グループ名	メンバー名
	ねらい	キーワードと 発達段階に留意した点
	キーワード ・動物の顔 ・色 ・音	発達段階に留意した点 ・動物の顔は、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。 ・色は、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。 ・音は、子どもが喜ぶおもちゃである。
材料・道具	発想	最終結果(良い点・改善点)
・紙の空き箱 ・糊 ・紙 ・ペン ・マジック	動物の顔は、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。 色は、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。 音は、子どもが喜ぶおもちゃである。	・動物の顔は、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。 ・色は、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。 ・音は、子どもが喜ぶおもちゃである。

図4 2歳児の手作りおもちゃ (Oグループ)



図案	作品名	
	対象年齢・年齢	作成にかけた時間
	グループ名	メンバー名
	ねらい	キーワードと 発達段階に留意した点
	キーワード ・音の出るおもちゃ ・顔が笑っている ・足が動く	発達段階に留意した点 ・音の出るおもちゃは、子どもが喜ぶおもちゃである。 ・顔が笑っているのは、子どもが喜ぶおもちゃである。 ・足が動くのは、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。
材料・道具	発想	最終結果(良い点・改善点)
・紙の空き箱 ・糊 ・紙 ・ペン ・マジック	音の出るおもちゃは、子どもが喜ぶおもちゃである。 顔が笑っているのは、子どもが喜ぶおもちゃである。 足が動くのは、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。	・音の出るおもちゃは、子どもが喜ぶおもちゃである。 ・顔が笑っているのは、子どもが喜ぶおもちゃである。 ・足が動くのは、子どもが興味をもちやすいおもちゃである。

図3 1歳3か月から2歳未満児の手作りおもちゃ (Nグループ)

完成した作品を展示し、各グループが順番にプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションでは、作品に使用された材料やセールスポイント、発達段階に留意した点などを中心に発表を行った。作品全体を通して、6か月未満児を対象とした作品では音の出るおもちゃが多く、6か月から1歳3か月未満児ではブロックなど積み上げて楽しむおもちゃ、1歳3か月から2歳未満児では、パズルや動く車など形やキャラクターがはっきりしているおもちゃ、2歳児では大型で目的がはっきりしているおもちゃが多かった。各グループのプレゼンテーションを聞いて、他の学生はその作品に対する感想や意見を評価シートに記入をした。評価シートでは、自分たちのグループにはない発想や工夫について賞賛するコメントが多かったが、乳幼児の安全面を指摘する意見もみられた。

このように、手作りおもちゃに関して作品の企画から作成、発表、評価までの一連の流れを学生主体で行ったが、最終的にその要点をまとめた作品集を

筆者によって作成し、後日学生に配布をした。その作品集の例の一部を図5で紹介する。

作品の概要	
Nグループ	
作品名	コロコロボット
作成日	7月12日
対象月齢・年齢	1歳6か月
材料	ティッシュ箱、トイレットペーパーの芯、紙コップ、蓋等
作成までの所要時間	90分
おすすめポイント	食べて出ることを学ぶ、シロとリコで親しみやすく
おもちゃの効果	コロコロする楽しさ、入れる出す作業を楽しむ
改善点	スムーズに転がるように、口が狭い、壊れやすそう

図5 作品集の例

6. 考察

今回、科目「乳児保育」の授業内で学生による手作りおもちゃの作成を行った。今回の授業で手作りおもちゃを作成する際、発達段階に応じた子どもの感覚機能や認知機能、運動機能、社会性の発達などについて考慮するだけではなく、手作りおもちゃを通して人と人との触れ合いや情緒的な感情を育む大切さを学ぶことが重要であると感じた。また、おもちゃの作成を通じて学生同士が協力し、意見を出し合い、最終的に他のグループとおもちゃを評価し合うことが、短時間であっても良い作品を作ることができるという自信につながったのではないだろうか。今回短い授業時間内で手作りおもちゃを作成するという制約を課したが、その理由は実習中に手作りおもちゃを作成しなければならなくなった場合や、保育者として働き始めた時に手早くおもちゃを作れるようにするためである。時間と費用をかければ、かなり凝ったおもちゃを作成することはできるが、今回のように廃材を使用することで誰でも簡単におもちゃが作れ、また子ども達が遊ぶだけでなく、保育者や保護者と一緒におもちゃを作ることができる。こうした手作りおもちゃを通じて、子どもはものを作る喜びや達成感を感じ、また創作意欲をかき

立て、感性を育み、友達とコミュニケーションを交わし、自己を表現することができる機会になるのではないだろうか。

科目「乳児保育」の達成目標では、「3歳未満児の発育・発達について学び、3歳未満児の生活や遊びについて理解することができる」としている。3歳未満児は、ヒトの人生の中でも成長・発達が著しい時期である。心身はまだ未熟であっても、ハイハイからつかまり立ち、歩行の確立といった運動機能から、喃語から初語、一語文からの語彙の爆発的な増加といった言語機能まで、基本的な発育がこの時期にみられる。また、集団生活の中で自我を育み、体験や経験から人への思いやり、社会性などを学ぶようになる。そういった発達段階を理解することは重要だが、発達段階だけに注目するのではなく、子ども一人ひとりの個性にも目を配り、子どもが十分に遊べるためには、保育者も心から遊びを楽しまなくてはならない。今回の授業後のアンケートでも、「作る作業がとても面白かった」「簡単に作れるので保育現場に出たら作ってみたい」「実際に作ったおもちゃで子どもに遊んで欲しい」などの意見もあり、短時間ながら内容の濃い演習になったのではないかと思う。その一方で、「もう少し安全面に配慮すれば良かった」「発達に気を付けながら作るのが難しかった」といった反省コメントもみられた。発達段階を考えると、0歳児では感覚と運動を中心とした遊びが適している。見るもの全てに興味を示し、音が鳴る方へ耳を傾ける。そして手を伸ばし、ものを掴もうとするが、届かない時は這ってでもものに近づこうと体を動かす。見て、聞いて、触って、五感を使って遊びを楽しむが、何でも口に入れてしまうなど、衛生面や安全面にも配慮が必要となる。今回の作品でも、材料が外れてしまわないような工夫や間違っても誤飲しないような大きさにするなど、改善が必要な点もあった。1歳以上になると指の巧緻性が発達してくるため、小さいものを掴んだり、回したりするようになる。また、この頃から模倣遊びをするようになり、食べるまねをしたり、積み木をおうちにするなどの見立て遊びも盛んになってくる。図3の作品のような、ロボットが果物を食べて、お

腹を通して体の外に出るといった食事と排泄を見立てた遊びができるものも楽しいし、図4のような動物の口を動かして、まるで動物に成りきって会話を楽しんでいるような遊びも面白いと感じた。

このように、科目「乳児保育」では、低年齢である0歳から3歳未満児を対象とした手作りおもちゃの作成をしたが、学生が演習を通じて発達段階を理解し、未熟でありながらも著しい発育をする子どもの心をより豊かにし、月齢・年齢にふさわしい遊びを通じて援助できる方法が学べたのではないかと考える。

7. 今後の研究課題

この作品は夏に開催された本学のオープンキャンパスの保育学科ブースにて展示した(図6)。展示ブースのスペースの関係で全ての作品を展示することはできなかったが、オープンキャンパスに訪れた高校生や保護者らが、実際に手に取ったり、作品集に目を通したりしていた。この作品の展示にあたり、科目「乳児保育」という授業において、どのような意図でこれらの作品を作成したのかについては説明していなかった。そのため、来場者には短時間で作成した作品が物足りない出来映えに映ったかもしれない。廃材を使用し、短時間で作成できる手作りおもちゃをテーマとしたことを、より強調した展示の仕方を工夫したい。また、作品集を学生に配布したが、その作品集を活用することができたかどうかのフィードバックを行っていなかったため、次年度は作品集の活用方法についても検討したい。



図6 オープンキャンパスでの展示の様子

8. 最後に

今の世の中には既製品のおもちゃに溢れている。近年では、国内で作られたおもちゃ以外に、海外製品のおもちゃも多く、シンプルなものから、色や形、機能など凝ったおもちゃまで多種多様である。そして、そういったおもちゃがインターネットなどで気軽に閲覧し、画面をクリックするだけで購入でき、翌日には手元に届く時代である。また、子ども向けのアニメや番組を観て感じるのは、その番組に登場する主人公やキャラクターが使用するアイテムが、ひと昔前に比べるとおもちゃとして商品化しやすいような形状や構造になっていることである。子どもはその主人公が使用しているアイテムを近所のおもちゃ屋などで購入することができる。まるで、自分がその主人公と同一のアイテムを使用しているような気分になれるのである。このように商品化されたおもちゃは非常にクオリティが高く、購買者である子ども(時に大人を巻き込んでいることもあるが)の気分を高揚するが、どこか愛着に欠けるといふか、購入する時が感情の最大のピークであり、その後気持ちが冷めていくように感じてしまう。しかし、今回のような手作りおもちゃには、既製品のおもちゃにはない製作者の温かみがある。既製品のおもちゃは非常に完成度が高いが、誰でもお金を払えば手に入れることができるものであるため、子どもにとっての「オンリーワンなおもちゃ」にはならない。それはそのおもちゃを作る人が子どもに見えるわけではなく、作る人の思いが遊ぶ子どもに伝わることは難しい。決して高価なおもちゃでなくても、作る側の思いが伝わるような温か味のあるおもちゃであれば、子どもがそのおもちゃを大切に思い、また子どもの心を豊かなものにしてくれるのではないだろうか。

引用文献

- 1) 厚生労働省(2016)「保育所等関連状況取りまとめ」, p1
http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000098603_2.pdf 2016年12月20日閲覧

- 2) 同上, p5
- 3) 勅使千鶴 (2007) 『子どもの発達と遊びの指導』
ひとなる書房, p16
- 4) 菊池篤子 (2014) 「『乳児保育』に対する学生の
意識調査 ～魅力と困難さに関する一考察～」,
小田原女子短期大学研究紀要 第44号, p28
- 5) 野中千都 (2008) 「『乳児保育Ⅱ』の教授内容に
関する一考察 ～学生によるアンケート調査より
～」, 西南女学院大学紀要 第12号, p166-169

(受稿 平成29年1月23日, 受理 平成29年2月7日)

